



現代人形研通信

6号 2024年10月発行

contents

・現代人形研からのお知らせ

・インフォメーション

・展覧会レポート

とくいあや個展、影山多栄子個展

・インタビュー 海外作2作家の初来日

マーレン・フェアヘルスト、ジョー・エレン・トリリング

・「わたしの取り組み」 福田望

※徒然コラムはお休みします。

インタビュー

「海外2作家の初来日」

マーレン・フェアヘルスト Marlaine Verhelst (オランダ)

ジョー・エレン・トリリング Jo=Ellen Trilling (アメリカ)

二人の作家に日本と欧米の創作人形の
違いなどについて尋ねてみました。



ジョー・エレン・トリリング「シンデレラ」
(ドールアート展 in うつくしま出品作品)



マーレン・フェアヘルスト「魚の世話をする」
(ドールアート展 in うつくしま出品作品)

現代人形研からのお知らせ

第1回総会終了

当会、特定非営利活動法人現代人形文化研究会は、9月1日に日比谷図書文化館スタジオプラスにて、第1回総会を開催、令和5年度の事業報告と会計報告を行いました。正会員数の過半数の参加により、議事が成立しました。

出席正会員数 35名（うち委任状20名 書面表決書7名）正会員総数40名

当日は台風の影響が強い予報があり、総会後に予定していた、よねやまりゅう氏を迎えてのゲストトークは延期とさせていただきます。

CoNiCS（コニックス）展を開催します。

当会の会員のための自由な人形展です。

27日閉場後に中華街での懇親会を計画しています。

来年は東京都美術館で全国公募展開催のため、CoNiCS展は来年は開催いたしません。

会期 11月27日（水）～12月1日（日）10:00～17:00（16:30 最終入場）

会場 横浜人形の家 多目的室 神奈川県横浜市中区山下町18

出品者名（申込順） 風らい坊 大八木ミノル 原田万紀 矢部藤子 一実 古城真理 高村とき枝 廣安瑞枝
ちしたかずよ 有田依句子 七衣紋 田中裕子 アトリエ・シュガール 高村とき枝 成瀬麻里子 雛罌粟人形堂
杉田明十志 zazie（ザジ） 古屋真帆 塩田真利 くるはらきみ 影山多栄子 現代人形文化研究会理事作品

招待出品 Marlaine Verhelst（オランダ） Jo=Ellen Trilling（アメリカ）

※駆け込み出品希望者・懇親会参加希望者 11月5日まで受け付けます。

- ・展示 まだ展示枠があります。ぜひご参加を。
- ・懇親会 初日27日は招待作家マーレン・フェアヘルストが午後から在廊予定です。また同日の懇親会（17:30くらいから）にも参加します。懇親会は出品者でなくても出られます。希望の方はお問い合わせください。

問 member.gendainingyo@gmail.com（11月5日まで）

年会誌 原稿募集

当会は年に1回、年会誌を発行する予定です。これにともない、以下の原稿を募集します。

- ・人形に関する考察、論文など。
- ・アーカイブに推す作品や展覧会のレポート

※展覧会・作品レポートは随時募集しています。基本的に当年発表の新作、展覧会は個展が対象です。

自薦他薦可。他薦の場合は対象が当会会員でなくても構いません。年会誌はその年の優れた作品や表現をアーカイブとしていくことを目的としています。

関心のある方は、member.gendainingyo@gmail.com の羽関までご連絡ください。内容を編集委員会で検討させていただき、お返事をいたします。

インフォメーション

・緑の地平線 2 (オブジェ・平面)

11月5日(火)～11月13日(水) 11:00～18:30 最終日は16:00まで 会期中無休

会場 ストライプハウススペース M、Bフロア

東京都港区六本木 5-10-33 TEL 03-3405-8108

※会期中イベント

11月9日(土) 13:00から 無料

【パフォーマンス】石田百合

【トークイベント】橋田真(スタジオジブリ)・塚原操(ストライプハウスギャラリー)・羽関チエコ

※トークイベントでは2004年の東京都現代美術館での球体関節人形展、ストライプハウスで個展を開催したときの天野可淡などをテーマに人形と美術の関係などについて語る予定です。当会理事長の羽関が登壇します。

・上野延子創作人形教室展 2024

11月7日(木)～12日(火) 10:30～17:30 (最終日は17:00まで)

会場 ギャラリー悠

東京都国立市中 1-9-38 1F

TEL 042-575-2051

・第10回 ドールアート展 in うつくしま

同時開催 第9回全国創作人形コンクール

11月16日(土)～21日(木) 10:00～19:00 最終日16:00まで

会場 MAX 福島 4階 AOZ(アオゾ)

福島県福島市曾根田町 1-18

主催 ドールアート展 2024in うつくしま実行委員会

事務局 960-8062 福島市清明町 1-10 ロイヤルレジデンス 3号棟 500号室 TEL 024-522-1305

・CoNiCS (コニックス) 展

11月27日(水)～12月1日(日) 10:00～17:00 (入場16:30まで 最終日15:00まで)

会場 横浜人形の家 多目的室

出品(当会会員) 招待作家 マーレン・フェアヘルスト、ジョーエレン・トリリング

・ドールアニマルワンダーフェスティバル

12月1日(日) 13:00～17:00 ★前売券の先行入場チケット(1500円)をお持ちの方は11:30より入場

会場 東京都産業貿易会館浜松町館 4階

※当会も参加します。

入場ルールの詳細は公式サイトでご確認ください。 http://dwf.d.doool.jp/dwl/l_index.html

第1回中島清八教室展

12月20日(金)～24日(火)

12:00-19:00 (最終日16:00まで)

会場 Gallery NIW

東京都文京区関口 1-44-8

12人の生徒が参加する教室展。当会会員の上妻みどりさんも出品されます。

展覧会レポート

とくいあや 個展「かたつむりの歯」

10月5日～11月4日 gallery yolcha (大阪)

詩人であり偶っこ人形劇団ニッチのメンバーであるイルボンさんが「車掌」を務めるギャラリーヨルチャは細長い形状の店舗を列車（ハングルでヨルチャ）に見立てたユニークな空間です。展示スペースは屋根裏のような天井が低い細長い空間で、観にこられた方は靴を脱いで梯子を登って展示を見ることになります。天井が低く立つことはできないので、見る人は地べたに座ったり、寝そべったりして鑑賞することになり、人形という存在との境界線は曖昧になります。

ヨルチャで初めての個展となるととくいさんは「作り始めたころからずっと変わっていないのですが、自分の中では、”人形を展示する”という感覚は全くなくて、人形と、見に来てくださる人が”同じ空間に居る、在る”こと、そういう、”空間をつくること”を求めてきたと思います。ヨルチャでの個展は初めてなのですが、以前石田百合さんと二人展をさせていただいた時にあの場所を知って自分が求めていることにぴったりの場所だと感じていたので、今回も楽しみにしていました」と語ります。



画像 来場者提供

そのとくいさんと作品の世界観を、イルボンさんは次のように表現されました。

とくいあやは、近年自身の身体感覚と向き合う中でよりパーソナルなものづくりを続ける。

人や動物のからだの組成をミクロの視点から見つめるおおらかさと、自分も生き物として形作られているというおぞましさを抱きながら、その手を動かしつつ自分の中に潜む違和感を消化してゆく。

そうして生まれたのは、肌や衣服、自他や内外という境界の曖昧な人形たち。

その存在の希薄さは逆に強い存在感へとつながっている。

彼らは何者でもないという不安と安心を両方抱えているように見える。

それは日常や異国での一人旅でたゆたうわれわれの姿と似ている。

とくいさんの制作の姿勢や本質がよく語られていると思います。

展示では本人が手漉きした紙で作った万華鏡も出品されたそうです。その中には「空き地や海辺で拾われた植物の欠片、虫の死骸、漂流物」といったものが入っていて、イルボンさんによれば「とくいあやさんの視点を擬似体験したような気がした」そうです。

編集執筆 羽関チエコ

協力イルボン (gallery yolcha)



撮影 とくいあや

影山多栄子展「楽屋のはなうた ルルル」

10月19日～10月26日 ギャラリー・ノンクプラッツ



2003年に初個展を開催以来、その時々の変化を帯びながら影山作品は進化します。その変化は、たとえば今回は素材でした。本来メインの素材は粘土、と語る影山さんの10点の新作は布人形。同じリネンの布地を使うという制約を、あえて自身に課したそうです。どれも愛らしい表情ですが、いくつかの人形は首が回転して表と裏が違う表情を見せます。それは陽気さとともに神性をあわせもつ、素朴なカチーナ人形を彷彿とさせます。

布地に絵具で描かれる丸や線の模様は意味はなく、それよりも大切なのはリズムであり、たとえばドット模様は水蒸気や霧のようなイメージで「つけてしまう」のだそうです。

今回の作品を制作しているとき、MISOROGI 人形展の出品をきっかけに生まれた「こっぱのこ」を大きくしているような気持ちでした。初めて作った時は、サイズを何センチの高さまでと決め、使う色数も制限しました。制約のなかでいかに自由に作るかという遊び心に満ちた「こっぱのこ」は影山さんのなかですぐに完売する人気作品となりました。「こっぱ」たちを区別するためにつけられた「あ」「か」「さ」・・・という名前にしても、知らずに音感に頼っていたようです。

進化していく影山作品を面白いと感じさせる根幹には、言葉のリズムと音感があるのだと思います。それは詩人にとって不可欠の感覚であり、言い換えれば影山さんは人形詩人ともいえるべき創作世界を展開しているのでしょう。

ところで、変わったタイトルは、会場のイメージからきたものだそうです。

会場のノンクプラッツは筆者が2004年にDOLL FORUM JAPANの編集事務所を兼ねて始めたギャラリーですが（オープン時は東京都府中市）、当時も今もそこからいろいろな企画が生まれていくことが楽屋のイメージで「そこで作業する人の鼻歌を聞きちゃった！」と「ルルル」や「ラララ」といった楽しいタイトルが生まれたそうです。ノンクプラッツの本質を見抜いたコンセプトで展示をまとめる影山さんのプロ意識に脱帽しました。（羽関チエコ）



インタビュー

海外 2 作家の初来日

マーレン・フェアヘルスト Marlaïne Verhelst (オランダ)

ジョー・エレン・トリリング Jo=Ellen Trilling (アメリカ)



マーレン・フェアヘルスト (オランダ)

Marlaïne Verhelst (The Netherlands)

1954 年生まれ

美術学校でイラストレーションを専攻。

人形制作は 1977 年から始め、世界の創作人形界をリードする作家の一人である。影響の多くは、人形劇、アーサー・ラッカムの絵画、劇場美術からの印象による。

ビスク磁土の直接造形をはじめ、ペーパーマッシュなどあらゆる素材で人形を制作、現在は紙粘土を主な素材としている。

NIADA (全米人形作家協会) 会員

DABIDA (オランダ・ベルギー人形作家協会) 元会長



ジョーエレン・トリリング (アメリカ)

Jo=Ellen Trilling (USA)

NY 州立大学ニューバルツ校を卒業後、1973 年にニューヨークのアート・スチューデント・リーグで絵画を学ぶ。アメリカをはじめ、世界のギャラリー、美術館で展示多数。

布を素材とする造形で教養とウィットとエロティシズムを備えた動物作品は、マドンナやエルトン・ジョンなどの著名人にもコレクションされている。

NIADA (全米人形作家協会) 会員

ヨーロッパとアメリカのそれぞれの創作人形界の代表的な作家が来日することになりました。オランダのマーレン・フェアヘルストさんとアメリカのジョー・エレン・トリリングさんです。二人の作品は過去に日本の展覧会や美術館で紹介されることはありましたが、本人が来日するのは初めてです。

11 月に福島で大竹京さんを中心に開催されるドールアート展 in うつくしまの実行委員会が二人を公式に招聘することを受けて作品を展示します。また 9 月に東京の丸善本店ギャラリーの MISOROGI 人形展で作品を展示 (終了)、当会の CoNiCS 展でも作品を展示することになりました。

来日前のお二人に、日本と欧米の創作人形に関する違いなどについて、短いインタビューをさせていただきました。(取材・文 羽関チエコ)

問い

1. 日本の創作人形について知っていることはありますか？ あるとすれば、どう思いますか？
2. もし、欧米と日本の創作人形に違いがあるとしたら、それはどんなものでしょうか？
3. 今回の日本の訪問では何を期待していますか？

マーレン・フェアヘルスト

1. 私は日本の人形の専門家ではありませんが、もちろん日本の人形作品を見たことはあります。私は民芸的な人形が好きです。

国際展で見る日本の創作人形は、あまりにも完璧にできているので脱帽です。あるとき、日本の友人が素晴らしい創作人形の本を見せてくれました。それはとても美しかったのですが、私の目にはとても悲惨なものに映りました。日本の創作人形のそういう一面は私は理解できないし、友人はそれを説明することはできませんでした。

でも、MISOROGI 人形展を見た時は、作品の「不完全さ」に感動しました。完全でないアートには、より多くの愛、創造性、表現力があると、私は強く信じています。

では、BJD について。私は大好きではありませんが、それを取り巻く全体としての文化は好きです。若い人たちが自分の BJD と同じようにして、写真で同じようにポーズをとります。人形と同じような服を着ます。私の孫は私が日本に行くと言ったらとても羨ましがっていました。孫たちは、日本の小さなキャラクター人形が大好きなんです。それを創作人形というべきかわかりませんが、誰かがデザインしたものではありません。

2. いま既に述べたように、日本の創作人形には欧米の人形にはない特徴があります。または異なるというか。欧米にある BJD は、いまはほとんどが日本から輸入されています。

私たちの文化は異なりますから、伝統的な人形も異なります。西洋人の顔は違いますから、鏡に映った顔から造形したものは、反対側の世界の誰かから造形した顔とは違うものになるでしょう。地理的な条件によって、アートの表現方法が変わります。山々に囲まれたスイスのアーティストは、島に住むアーティストとは異なる影響を受けていると、私は心から信じています。そして、国土の半分が海に面しているオランダでは、私たちの精神は解放的なのです。

3. 異なる文化を体験し、良き友人と時を過ごすことです。

私の作品が、東京、福島、そして横浜で展示されることをとても誇りに思います。



・魚の世話をする
（「世話をする」シリーズ）
55 cm
手と頭部は直接造形のビスク。
魚は石塑で制作。直接彩色。台に固定。

ジョー・エレン・トリリング

1. 私が初めて知った日本のアートは、父親がくれたギフトでした。

それは黒いピカピカの台に乗った小さな小さな相撲力士の人形でした。私はそのとき10才でした。私はその大きさ、奇妙さ、形式の両方に感激しました。普通の人形の形ではありません。(訳注 「相撲力士」の人形ではなく、御所人形をモデルにした人形と思われる。)



2. 長年にわたり、私は日本の正式な肖像人形の威厳、存在感、衣装の細部へのこだわり、そして態度に感銘を受けてきました。

私が見つけたこけし人形は、そのシンプルな形や描かれた模様以上のものを語っています。抱きしめたいです。

私が育った西洋の人形芸術は、古代の豊穡の象徴、宗教的な象徴、そして何千年にもわたる商業用人形から学んできましたが、精神的なものから商業的なものへと変化してきたようです。それでも、人形は今でも人々を魅了し続けています。

東洋と西洋の現代創作人形には、精神が戻ってきているのがわかります。しかし、子供にとって大切な人形は、布やプラスチックでできた単なる構造物以上のものです。

3. この訪問ができてとても光栄に思います。できる限り地元の文化を吸収し、人形の歴史と日本の人形芸術の過去と現在に関する私の限られた知識を広げることができたらと思います。想像もできないものを見たり感じたりできると思います。未知の人との出会い、すべてを楽しみにしています。



日本での予定

◎ドールアート展 in うつくしま

作品展示 (開催概要は「インフォメーション欄」をご覧ください。)

11月16日(土) オープニングセレモニー

11月17日(日) 午前10時30分から「作品解説」二人の作家が作品のコンセプト、技法など自作の前で作品について解説します。質問も可能です。解説は作家が順番に行い、時間はそれぞれ30分くらいを予定しています。(通訳あり)

◎CoNiCS (コニックス) 展

作品展示 (開催概要は「インフォメーション欄」をご覧ください。)

マーレン・フェアヘルストのみ 11月27日午後から在廊～懇親会参加予定

「Knock Knock---」 (私の愛した犬)

19cm 素材 布、ワイヤー芯、アクリル絵具で彩色 木製の台(引き出し)に固定

引き出しには手製の本があり、ページにはペンとインクで文字が書かれている。

タイトルはアメリカの言い回し(犬がドアにいる、誰か来たの?)によるが、実際は作者が愛した犬たちの思い出による創作である。

わたしの取り組み

新しいコーナー「私の取り組み」では、会員の皆様がそれぞれ課題として取り組まれているテーマ、技術、研究、創作などをご紹介します。（不定期掲載） 「徒然コラム」はお休みします。

天野可淡研究についての目標と抱負

福田望

天野可淡の作品について書くことは、37年という人生を全力で駆け抜けた人形作家の存在を後世に繋ぐ試みである。

天野可淡（1953～1990年）は70年代半ばから逝去する90年までのあいだ、精力的に作品を生み続けた人形作家である。人形以外にも油彩作品、劇団で使用する仮面や中型のオルゴール作品、大小のオブジェなど多様な表現形態の作品を生み出し、数々の展示や個展、晩年にはストライプハウス美術館の1階から3階を使った個展をこなし、今これからという矢先に事故によって早逝した。

筆者は当時数多くの人がそうだったように、思春期の頃に書店でトレヴィル刊の天野可淡人形作品集と出会い、胸をときめかせながら、初めて出会う球体関節人形という不思議な造形の世界への入り口を開いた。出会うと共に、巻末に掲載された年表で作家が数年前に逝去していることを知り、作品の衝撃の余韻が残る中でどこか虚ろで神妙な思いがしたことを覚えている。

98年、セゾングループの解体に伴って出版社トレヴィルが解散した。可淡のパートナーであった吉田良（当時・吉田良一）が撮影した作品写真集『KATAN DOLL』（1989刊）『KATAN DOLL fantasm』（1990刊）、没後に刊行された追悼作品集『KATAN DOLL Retrospective』（1992刊）も、それに伴い入手困難になった。

その後、長らくの空白をおいて99年に浅草橋のマリア・クローチェ（人形屋佐吉）で開催された回顧展まで、その作品はファンのあいだでは幻となり、2004年の東京都現代美術館での「球体関節人形展 ～DOLLS of INNOCENCE～」(東京都現代美術館)、同年の渋谷マリアの心臓（人形屋佐吉）の開館までのあいだ、カタンドールのファンは作品を二度と見られないのではないかという半ばの覚悟と諦めの中を彷徨うことになった。（2007年に復刊ドットコムでの得票をもとにエディシオン・トレヴィルから刊行された改訂版や、作家の来歴の資料としても貴重な改訂版『～Retrospective』も大変残念なことに現在は品切れ・重版未定状態である。）

筆者は2004年、25歳の時に書店のギャラリーで『DOLL FORUM JAPAN』と出会い、過去連載された「可淡疾走」についてメールで問い合わせをしたことを端緒として、編集長である羽関チエコ（当時小川千恵子）さんとの知己を得た。新版で増補された資料性の高い『Retrospective』が刊行されるより前のことで、天野可淡の存在は真影も無く伝説めいた語りの中にうずもれていた。「可淡疾走」はその中で貴重な資料の一つであった。

筆者にとって可淡の作品は思春期を共に生き、その後の人生を支えた何にも代えがたい存在だった。天野可淡が生きていたらその創造世界の地平になにを見たのだろうか、というのが私の問いとなった。足りない

ながらも新聞記事や雑誌のバックナンバーなどの資料を集め、榊山裕子さんの「カタログレゾネが作られるべき作家である」という意の発言を読んだ後から、わかる限りで年代順に時代の影響と作品の変遷に思いを馳せた。可淡が女子美時代に油彩作品のモデルとしてアンティークドールを求めたこと。高額ゆえに人形を自作し始めたこと。ハンス・ベルメールを採り入れた独自の球体関節へと作品を発展させたこと。骨格のような手足の表現。吉田良からの樹脂素材の影響、オブジェ作品の展開、「人を愛する人形を作りたい」という最後の思い。そしてあるはずだったその、わかり得ない未来の空白について、常に考え、折々の展示作品と長い年月をかけて対峙してきた。あとで展示作品を見てわかったことでは可淡は高校生の頃から人形を作ることがあり、そこにはすでに人形の瞳のうるみ、膨らんだ腹部という後のカタンドールに見られる特徴があった。このことは澁澤龍彦や北方ルネサンス絵画に源流の一端があるのではと、筆者は夢想している。現在、国立近代美術館・工芸館に猫の人形（サイズ、90センチ後半）ともう1点の人形作品（同）が収蔵されており、所蔵作品展や企画展、Web上の写真で見ることができる。

2011年の秋頃、羽関さんにお誘い頂いて、可淡の実家で開催された「せいか会」の展示に伺ったことがある。可淡の多様な作品が玄関に並び、室内では可淡の母である大作可星さんの生け花教室の生徒さんの花々を囲むように作品が壁面に配置されていた。壁に掛けられた、ふたりの女性の間に花冠を被った頭蓋骨と、胎児が描かれた油彩作品を前に「新しい子ども」だと私は呟いた。

文章にできることは、できる限り作品に基づいて作家の往時の証言を記し、のちへと伝えることである。書くことは、存在を歴史に残す試みである。そのストーリーはどうあがいてもそれを記す者の「私」という主観から逃れられない運命ではあるが、書くことの暴力と、希望とのあいだを慎重に踏み分けながら私はその一端を担いたいと思う。

天野可淡の作品は人形作家の卵だった後の作家たちに「私も作ろう」と思わせるような作品であった。そしてそれは自らの心の暗部や深淵を覗かざるを得ずに生きる人たちへの、力強いエールでもあった。これほどにイメージのあふれる世界になっても、未だ文章に書き取られることのない作品は目次と索引を失ってやがて忘れ去られる。源流がなかったことにされ、あやうくも簡単に置き換えられる。歴史とは、「書かれたもの」にしか残らないものだ。

現在その作品を目にする機会が決して誰にでも開かれているとは言えない天野可淡の作品について、私は今後も研究し、それが独りよがりにならないように、可淡とその作品を知る方々に問いかけてみたいと思う。



ヨシダヨシエ企画「人形館」（1979）天野可淡の展示 撮影 羽永光利
（『愛玩拒否の人形 土井典とその時代』より）

特定非営利活動法人現代人形文化研究会

会員作品による人形展

CoNiCS 展
コニックス



2024年11月27日(水)～12月1日(日)

10am～5pm(入場4:45pmまで) ※最終日 3pm閉場

CoNiCS展は入場無料です。

横浜人形の家常設展や企画展へはそれぞれ別途入館料が必要です。

横浜人形の家 2階多目的室

横浜市中区山下町 18番地

TEL:045-671-9361 URL <https://www.doll-museum.jp/>

出品者名(申込順 10月5日現在) 風らい坊 大八木ミノル 原田万紀 矢部藤子 一実 古城真理 高村とき枝
廣安瑞枝 ちしたかずよ 有田依句子 七衣紋 田中裕子 アトリエ・シュガール 成瀬麻里子 雛髯栗人形堂
杉田明十志 zazie (ザジ) 古屋真帆 塩田真利 くるはらきみ 影山多栄子
現代人形文化研究会理事作品 【招待出品】 Marlaine Verhelst(オランダ) Jo=Ellen Trilling(アメリカ)

主催 特定非営利活動法人現代人形文化研究会

<https://www.gendainingyo.com>

東京都東村山市久米川町3-27-57 〒189-0003

TEL 042-395-7547 (ノックプラッツ内)

